

歌（短歌）の勧め

武藤 駿

私たちは、日々の暮らしの中で、果たしてどれだけの思いを相手につたえられているだろう。伝えるべき相手が大切な人であればいっそう、それを日常の言葉で伝えることが絶望的にむずかしいことに気づく。思いが深ければふかいだけ、その何分の1も表現できないことに愕然とする時がある。

そんなとき、歌でなら伝えられるということがある。歌を表現の手段として持つということは、そのような心の最も深いところに発する感情を、定型と文語という基本の枠組みに乗せて、表現させてくれる。

ひきよせて寄り添う如く刺ししかば聲も立てなくくずをれて伏す（宮 終二 山西省）
うつつそみの骨身を打ちて雨寒し此の世にし遇う最期の雨か（同上）

宮終二は日中戦争のさなか、いつ死ぬかも知れぬ前線で山西省を中心に転戦した。「部隊は挺身隊。敵は避けひたすら進入をこころがけよ銃は絶対にうつな」との命令あり。夜霧に紛れて奇襲を慣行する息詰まる戦闘場面、毎日が決死の戦いであった。

死ぬ側に選ばれざりし身は立ちてボトルの水を喉に押し込む（佐藤 通雅「昔話」2013 仙台）

これは東日本大震災を詠んだ歌である。自分は「死ぬ側にえられなかった」という思いが作者を支配する。それは安堵でもあっただろうが、一方で「死ぬ側」に選ばれた人々を思うことでもあるだろう。そんな複雑な思いを抱きながら、とにかく今ここにある「ボトルの水を喉に流し込む」だけだという。「身は立ちて」に、立つことのできることを喜ぶ思いとともに、立つことのない出来ず逝ってしまった人々への思いも籠って居よう。

このような社会に起こったできごと、事件や災害を、歌に詠むことは「機会詠」とよばれることが多い。様々な出来事が社会では起こっている。重要なものは記録として後世に伝えられ、それが歴史を構成する。しかし、そこで唯一抜けていくものは現場に居合わせた庶民の感情、その事件や災害をどのように受け止めたかという現場に居合わせた人々の感情、である。

短歌は、短く、かつ自己の感情を表現するのに最も適した表現形式である。その特性を活かして自分が何を感じたかを五句三十一音に残すことの大切さを思う。

（資料：永田和宏「現代短歌」）

各新聞社では「歌壇投稿欄」を設けて投稿された短歌を紹介していますが、ここでは、「朝日歌壇」の作品を中心に紹介していきます。

（なお前年投稿された中から、選者が推薦する「朝日歌壇賞」があります）

選者；高野公彦 永田和宏 馬場あき子 佐々木幸綱